

# 琵琶湖流域における課題と今後の研究の方向性について

- ▶ 各種対策の推進により、汚濁流入負荷（栄養塩等）は、一定削減されてきたが、琵琶湖流域では新たな課題が生じている。
- ▶ これらの課題は様々な要因が絡み合い、場も横断しているため、これからは、全体的な「つながり」や「循環」の視点が必要。

## 森林

流域へ影響を及ぼす

### 森林機能の変化

（渓流水、栄養塩、土砂供給 等）

## 地球温暖化の進行



放射性物質の  
**拡散リスクへの備え**  
（拡散時の影響、リスクコミュニケーション 等）

## 流域からの汚濁負荷の流入

（農業排水、工業排水、下水処理水 等）

## 農地



## 河川

### 水系のつながりの分断

（瀬切れ・堰堤・水田との落差 等）

## 市街地



### 人と水辺・琵琶湖との つながりの乖離

（ライフスタイル、レジャースタイルの変化 等）

## 湖辺

内湖

水陸移行帯の消失等に見られる

### 湖辺環境の変化（生息環境の悪化）

（湖岸堤、内湖消失、水位操作、水草繁茂、湖底の泥質化 等）

## 湖内

在来魚介類の減少等に見られる

### 湖内生態系の変化

（餌資源不足 [プランクトンの変化]、外来魚増加、栄養塩バランスの変化 等）

**琵琶湖～淀川～大阪湾のつながり**  
（生態系・文化）

# 研究の視点と総合解析

## 課題の 複雑化・フィールド横断化

(在来魚の減少など、様々な要因が複雑に絡み、場を横断するような課題が増加)

こうした課題に対応するためには、

- 個別の事象、要因、場に着目するだけでなく、全体的な『つながり』の視点が必要。
- 1機関の対応だけでなく、機関連携による知見の集約・総合化が必要。



### ① 事象のつながり、循環への着目

- 研究設計の工夫、研究間連携の推進により、事象や要因、場の『つながり』、『循環』に着目したアプローチを行う。

(例) ○ 水系のつながり (山—川—里—湖)

○ エサ関係のつながり  
(植物プランクトン—動物プランクトン—魚)

### ② 機関連携の推進による総合解析

- 各機関の連携により、知見や情報を集結し、総合的・全体的視点からの解析を行う。

